

2018年 平和首長会議 青少年「平和と交流」支援事業に参加して

Raquel de Santana Iraha (ブラジル、サントス)

青少年「平和と交流」支援事業（HIROSHIMA and PEACE）は、重要な、計り知れない価値のある学びの機会です。参加できて大変光栄でした。この感謝の気持ちは一生忘れません。HIROSHIMA and PEACEの夏期講座は、ヒロシマへの原爆投下や核の問題に関連する多くのテーマについて批判的で学際的な見方を教えてくれました。そして、現在の視点及び歴史的な視点、並びに政治的、社会学的、文化的、科学的、教育的な視点、メディアの視点、ローカル及びグローバルな視点、さらには感情や個人の視点まで検討されました。世界中から来た参加者たちと共に、そういったすべてのクラスに参加したことで議論は大変豊かなものとなり、新たな結論を導き出すことができました。新たな問いも提起されました。全体としては、核爆弾がどれほど大きな被害を与えるものであり、残酷なものであるかということ、また、いかなる場所でも禁止されるべきであるということが、多様な方法で明らかにされました。世界から核兵器をなくすことは、国境を越え、世代を超えて重要な事柄です。

同じ出来事を異なる側面から見ることにより、1945年の8月6日と8月9日が何を意味するかを、より深く理解することができました。私たちは広島平和記念碑を訪れ、被爆者の証言に耳を傾け、松井市長と会い、広島平和記念式典に参加することができました。これらすべての直接的な体験は、あの日何が起きたか、今日どのように理解されているか、将来どのような意味を持つかということをもさらによく理解するための土台となりました。このプログラムは有益であったばかりではなく、私たちを力づけてくれるものでもありました。とくに積極的行動主義の活動に関する講義はそうでした。

それに関して言えば、この支援プログラム参加者に向けた平和首長会議の活動の有益性を強調したいと思います。私達が暮らす街で実施された平和活動や、そこで今後行われる活動について各市との対話を求められることで、私は自分の市が行っている活動に注意を向けるようになりました。また、私がそうした活動をいかに当たり前のことだと思っていたかということに（一市民として、私は積極的にそれらの活動に参加できたという事実にも）気づかされました。このように自分を省みることで、ヒロシマとサントスで学んだことを結びつける存在として、私がどのように働くことができるか、そして、経験全体をいかに一つの文脈にあてはめることができるかが分かりました。よって、この奨学金制度の継続と、これに関連する活動がこれからも継続されることを強く勧めます。また、平和首長会議事務局を訪問し、実務レベルでの活動についてより詳しい説明を受け、平和首長会議についてのプレゼンテーションに対する補足とすることを提案したいと思います。8月6日に私たちは末廣恭子さんと共に平和首長会議の事務局を少しの間、訪れる機会がありました（予定外の活動）。興味深い、心を通わせることのできる時間となりました。

ヒロシマで学んだことをブラジルでの活動に還元していくことは簡単ではありません。なぜなら、私たちは異なる現実の中に暮らしているからです。そこでは、核の脅威はそれほど明らかなものではありません。しかし、平和な世界が重要であり必要であるというのは世界共通ですから、ヒロシマ及び平和首長会議のメッセージは、広めていかなければなりません。このことを心にとめ、私は次のような活動をする計画を立てています。

i. 私がヒロシマで学んだことをサントス・カトリック大学で国際関係週間の期間中（2018年9月18日）に講義する。私の講義では、核軍縮の重要性を取り上げるだけでなく、平和首長会議の働きや、サントス市が推進している平和活動、都市がどのように平和活動に参加し協力することができるかについても取り上げる。また、嘆願書のコピーを用意し、参加者が署名できるようにする。

ii. ヒロシマで私が経験したことについて、サントス日本人会の「#Tunasaguasdapaz」写真展のオープニングナイト（2018年9月13日）で短いプレゼンテーションを行う。この写真展では、プロ及びアマチュアの写真家がモバイル機器を使って撮影した写真が展示される。この展示は、「平和」をメインテーマとしている。サントス近辺の他の場所でも同様の展示会を行う。青少年「平和と交流」支援事業（HIROSHIMA and PEACE）の前の参加者である Lucas Alberto が、私と一緒にプレゼンテーションを行う。主な目標は、平和構築に関して私たちそれぞれが重要と考える点を示すこと。また、平和や、サントスがヒロシマ・ナガサキとの間に築いたような都市の連帯を考える一例として、私たちがヒロシマで経験したことを取り上げる。

iii. 論文を執筆し、私がサントス・カトリック大学で参加している「グローバルガバナンスとインターナショナルレジーム」に関する研究グループで、この問題について議論する。サントスが平和首長会議に加盟するプロセスや、その後の活動について、グローバル・ガバナンス及びパラディプロマシーの観点から研究することを目的とする。また、学術的な分野においてもこの問題を議論する。

iv. 平和に関わる活動に関して、サントス国際関係室を支援する。また、他の都市に平和首長会議に加盟するよう勧める。例えば、平和イベントを推進したり、必要であれば学術的なデータを利用できるようにしたりして加盟を働きかける。

これらの活動は、始まりに過ぎません。平和構築は終わりのないプロセスであり、その推進には全体的な取組が必要であることを、ヒロシマでの2週間で学びました。

最後に、この機会を与えてくれ、支援してくれた平和首長会議の組織及びそのスタッフに、感謝の意を表したいと思います。また HIROSHIMA and PEACE の夏期講座ならびに広島市立大学に関わる全ての人にも感謝の意を表します。そして平和首長会議のプログラムに参加した仲間たちにもありがとうございます。私たちが平和のネットワークを更に強固なものにして行けるよう願っています。